

NUPACE プログラムが直面する課題

—過去最多の学生数を受け入れた2019年度を振り返って—

国際教育交流センター国際プログラム部門

楠 元 景 子

1. はじめに

筆者が2015年7月に着任してから NUPACE プログラムの規模は年々拡大し、掲げられていた200名の目標は2017年度に達した。その後、受け入れ人数は増加し続け、2019年度には過去最高の218名を受け入れている。プログラムの拡大は、大変喜ばしいことであると共に、新たな課題も発生してきていることも否定できない。本報告では、受け入れ人数が218名に達した2019年度を振り返り、プログラムが直面している課題について整理し報告したい。

2. 受け入れ人数の増加

NUPACE プログラムは1996年に発足、初年度の受け入れ人数は54名であったが、2019年度には218名までに増加した。1996年度から2010年度までの増加傾向は緩やかであったが、2011年度には109名に達し、2016

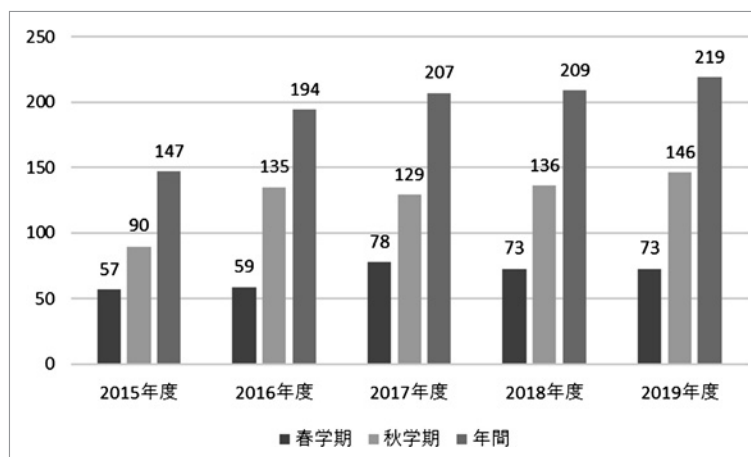
年度には194名へ急増、そして、2017年度には200名を超え(207名)、2019年度には過去最多の218名を記録した¹。

本プログラムでは、春学期(4月)と秋学期(9月)に学生を受け入れているが、その内訳をみると秋学期受け入れ人数の方が春学期よりもはるかに多い。筆者が着任した2015年度から2019年度までの各学期と年間の受け入れを人数グラフ1に示す。

グラフ1より、毎年度の秋学期の受け入れ人数は、春学期よりも多いことが言える。また、年間の受け入れ人数が増加している中、2017年度を除き、秋学期の受け入れ人数は年間の受け入れ合計人数に貢献していることが言える。

また、受け入れ人数とは別に、各学期の在籍人数についても紹介したい。各学期の在籍人数は、グラフ1の受け入れ人数(新規学生)、その前の学期に受け入れた継続生(留学期間が一年間の学生)で構成されており表1の通りである。

グラフ1 2015-2019年度の受入れ人数(学期別・年間)



¹ NUPACE Prospectus 2020-2021 (<https://nupace.iee.nagoya-u.ac.jp/en/pdf/nupace2020-21.pdf>), p.36

表1 2015-2019年度各学期の在籍人数 (人)

	春学期	秋学期
2015年度	110	102
2016年度	117	146
2017年度	150	145
2018年度	140	145
2019年度	146	156

表1の通り、新規で受け入れる人数と継続生とを合わせると、毎学期100名から150名以上の学生が在籍していることがわかる。つまり、NUPACEプログラムの教職員は、毎学期100名を超える人数に対応している。以上、受け入れ人数と毎学期の在籍人数の増加について紹介した。

3. NUPACE プログラムの体制

次に、NUPACE プログラムの体制について紹介する。2015年度から2019年度の間は、教員3名(教員1名は他部門と兼務)と事務員2名の合計5名でプログラムを運営してきた。しかし、プログラム運営には様々な業務があり、前述の体制では不十分と言わざるを得ない。

プログラム運営の業務には、アドミッション業務から学生受け入れと帰国時にかかる実務全般、教務関係(履修登録や相談など)、宿舎関係、学生交流関係、プログラム広報関係等々がある。しかし、前述の項で報告した通り、受け入れ人数が218名に達し、その上、毎学期100-150名を超える学生への対応やその他の業務をこなすには不十分な体制である。その上、2019年3月末で、教員が一名退官したことに伴い、教員2名と事務員2名の体制になる。しかし、業務量が減るどころか、益々増える今日、4名体制での運営は大きな課題となっている点は強調したい。

4. プログラムが直面している諸課題について

4.1 アドミッション業務

毎学期、グラフ1で示した人数を受け入れているが、願書の件数はその数字を上回る。アドミッションでは、願書を受け付けたのちNUPACE オフィスにて精査する。大まかな作業としては、まず、受け入れ基

準を満たしているかどうかの確認(言語能力と成績評価値(GPA))、必要な全書類がそろっているかどうか、そして、内容に不備がないかどうかである。加えて、学生からの問い合わせへの対応、そして、受け入れが承認されたのちに選考結果通知を各学生と各協定校にメールで通知する作業もある。

その中で、応募件数の増加で課題と感じているのは主に次の点である。

① 応募書類精査と学生とのやり取り

応募書類は、一件一件丁寧に確認している。世界中にある協定大学からの応募を受け付けるが、成績証明書や在籍証明書などは国々によって表記方法や成績評価方法が異なっているため学生に確認をとる必要がある。未提出の書類があれば、それらを取り寄せる。また、学習計画書・研究計画書の内容を読み、希望所属学部/研究科と合致しているかどうかを見極める必要があるが、必要に応じて学生に連絡を取っている。場合によっては、同じ学生と何度もやり取りが続くこともあるが、200名近くの応募者となると情報整理や応募書類確認作業の進行状況の把握が困難である。

② 推薦状の催促

本プログラムでは、応募者に推薦状執筆予定の教員の情報を応募時に提供し、NUPACE オフィスから教員へ直接連絡をとり、推薦状作成を依頼している。この作業で最も困難が感じられているのは、大学のメールアドレスを提供しているかどうか、そして、推薦状が期日までに提出されない場合は、学生や教員に催促のメールをすることである。この催促の作業は、応募者の約3分の1から2分の1ほどの数に上り、現在は推薦状作業の効率化を模索中である。

③ 成績評価値(GPA)の計算

JASSO 奨学金へ推薦するための基準の一つとして、個々の成績評価値(GPA)を算出している。2019年度は教員2名で算出していた。しかし、応募件数と世界各国の成績評価が異なるため、統一された計算方法は存在せず、各国の評価基準を理解した上で、4.0のスケールへ換算しなければならず、応募件数が多くなるにつれて換算に時間を要する。しかも、2020年度より教員一名で換算することにより計算方法を再考する必要があるが現在はそれを模索中である。

④ 選考結果通知

選考結果の通知方法も、改善すべき課題だと感じられている。選考結果を応募者にメールで通知しているが、個々の内容が異なるため一人一人に連絡している。結果として、事務員一人で応募件数分のメールを送信しなくてはならない。これについては、個々へのメールではなく一括で選考結果を通知できないか等の改善を模索している。

以上で、アドミッション業務の中の主な課題と感じている点について述べた。これらの作業は、アドミッションにおいて重要なプロセスであるため省略はできない。しかし、各々で工夫を凝らすことはできる。今後は、より効率化できる点について検討していきたいと考えている。

4.2 各部局での受け入れ

NUPACE 学生は、所属大学での専門と同様あるいはそれに近い部局に在籍する。

一次選考を通過した応募書類は、その後、各部局に受け入れの検討依頼をする。各部局では受け入れの可否を検討すると同時に、受け入れる学生に対して一人一人に、専門分野の近い指導教員が割り当てられる。指導教員は、履修登録の相談への対応や、特別研究学生であれば研究指導も行っている。受け入れている NUPACE 学生の人数は部局によって異なるが、受け入れ人数の増加により指導教員を探すことが困難になってきているのではないかと考えている。交換留学生を受け入れることで名古屋大学の学生等にとって、多くの面において刺激になることは間違い。その一方で、受け入れ人数増加による各部局の負担も考慮しながら学生のアドミッションを進めていくことも重要ではないかと考える。

4.3 宿舎の確保

毎学期の受け入れ人数の増加の懸念事項として、宿舎の確保が挙げられる。NUPACE プログラムで受け入れている学生には大学の宿舎が保障されている。2018年度までは、学内から徒歩10・15分の距離にある国際唹鳴館、レジデンス山手ノース、レジデンス東山に NUPACE 学生を入居させていた。前者は、日本人学生との混同寮で、後者の二つは留学生や外国人研究者のみの宿舎である。受け入れ学生が急増した2016年度

から宿舎の確保が懸念されていたが、そのあと、2019年度に大幸キャンパスにレジデンス大幸（日本人学生との混同寮）が新たに建てられ、同年度の途中から NUPACE 学生が入居した。レジデンス大幸は東山キャンパスから地下鉄で約20分のところに立地しているため交通費が必要である。

しかし、レジデンス大幸が建てられた今日でも、NUPACE 学生のための宿舎の確保の心配は完全に拭えたとは言い難い。まず、春学期は、秋学期に比べ受け入れ人数は少ないが、空室状況は秋学期よりも少ない。それは、秋学期から始まる G30や国際言語センターの上級日本語特別プログラム等があるため、秋学期に向けて空室が多く出てくる。それに比べれば、春学期はそれぞれのプログラムの年度の途中であるため空室数は限られる。このような状況の中で、今後、春学期の受け入れ人数がさらに増加すれば、宿舎の確保は困難になってくるのではないかと懸念する。一方、秋学期については確かに空室は多いが、グラフ1の通り、秋学期の受け入れ人数は150名近くに上る。今後も増加すれば、秋学期の宿舎確保も厳しくなるのではないだろうか。この点については、受け入れる人数とのバランスを考慮しながら進めていく他ないと考えている。

4.4 開講期の業務における課題

毎学期、NUPACE 学生が渡航した後に、1週間から14日間の間に表2に示すオリエンテーションやペーパーワークセッションが行われている。

表2 開講期に実施される主な行事

諸手続き関連	NUPACE オフィスでの手続き
	入寮手続き（学生ボランティア ACE とヘルプデスクと連携）
ペーパーワークセッション	区役所での手続きのための書類記入方法指導
	銀行口座開設のための書類記入方法指導
オリエンテーション	生活オリエンテーション
	教務オリエンテーション
	情報セキュリティ研修

表2の通り、名古屋大学での交換留学生在生活が円滑に進むように様々なオリエンテーションやペーパーワークセッションを行っているが、受け入れ人数の増加に

伴う主な課題には、①体制が不十分な中での準備や学生への対応、②オリエンテーションやペーパーワークセッションの会場の確保、が挙げられる。

まず、①については、各オリエンテーションの資料作り、日程調整、会場の確保、学生ボランティアグループや学生交流課との連携、受け入れ学生への対応等の業務がある。また、春学期の受け入れ時期に同年の秋学期のアドミッション業務と重複するため、その業務に事務員・教員がとられ、益々人手不足となっている。当然ながら、効率化を図るために業務内容を見直しているがそれには限界がある。

②については、渡日から授業が開始されるまでの日程の関係で、オリエンテーションやペーパーワークセッションは一回で済むように調整している。しかしながら、受け入れ人数が増えるにつれ、一度に150名近く収容できる学内での会場が限られてきている。ペーパーワークセッションを2回に分割して実施する等の工夫が必要かもしれない。一方、生活オリエンテーションは、一日かけて開催するため2回の実施は難しい。教務オリエンテーションについても、新規学生と継続生を一度に集合させるため会場を確保することは難しい。情報セキュリティー研修については、パソコン上で作業を行うので、環境が整っている教室を確保しなければならない。これまでは、学生の入寮日の関係などで、2回に分けて研修を実施していた。しかし、2020年度より担当教員が退官されたため、情報セキュリティー研修を引き継いだり、少ない人数での実施はキャパシティーの上では厳しい。現在は、進め方等を改めたり、マニュアルを改編したりするなどの工夫を進めているが、やはり厳しいと言わざるを得ない。

4.5 教務と日常生活のサポートにおける課題

4.5.1 教務関連

NUPACEでは、独自の履修登録システムや方針で運営しており、これを、渡日後の教務オリエンテーションで学生に説明している。また、履修登録期間中は教員1名が新規受け入れ学生と継続生に対して、個別面談を実施し、履修登録に関する相談に対応している（もう一名の教員は宿舎や日常生活の問題に対応）。表1に示した在籍人数をみると、教員1名で毎学期150名近くの履修登録相談に対応していることが分かる。個人面談の必要性は、最低履修単位数（15単位／学期、30単位／年）を履修しているかどうか、履修科

目に問題がないかどうか等を確認するためである。しかし、同時に学生と対面で話すことで、抱えている悩みや潜在的な問題をくみ取ることもできる。また、学生と話す場が少ない中、学生のことを知るために、面談は貴重な機会であり省略はできない。その一方で、受け入れ人数の増加と体制が強化されないことで教員に負担がかかってきていることも否めない。このような状況下で、学生のケアの質を維持しながら、教員の負担をどのように軽減できるのかは引き続き課題である。

4.5.2 日常生活関連

教務上のサポートと同時に、学生の日常生活上の問題にも対応する必要がある。

渡日後は、新しい生活への適応のためのサポート、また、滞在期間中は病気、宿舎でのトラブル、対人関係や、交通事故、精神面の問題など様々な面でのサポートは不可欠だ。

病気への対応は、状況に応じて病院へ付き添い通訳としての役割を果たすこともある。また、対人関係や宿舎で発生する問題に対しても、NUPACE オフィスが対応している。しかし、体制が改善されず受け入れ人数が増加しているこの状況下では、常に病院への付き添うことはできない。また、個々のケースへのフォローにも限界がある。それに対応するためには、他部署や学生ボランティアと連携をすることも必要になってきている。また、通訳デバイスの導入等の検討を行うなど、IT技術に頼る方法も探っているが、限界があると考えている。

4.6 学生同士・教職員と学生の信頼関係の構築

最後に、プログラムが拡大したことで、学生同士、教職員と学生の人間関係が希薄になってきているのではないかと感じている。

2015年に着任した当時、確かに100名弱の学生が在籍していた。NUPACE オフィスへの出入り、学期末に行われるパーティーの企画や参加においては、学生がより積極的にかかわる姿勢が見られたり、パーティー企画では、同じNUPACE 学生を巻き込んだりするなど、学生同士、学生と教職員の関係はまだ近いところにある印象であった。当然、受け入れる学生の性格やグループの特性などもあり、一概には言えないが、プログラムが拡大するにつれ、この点は徐々に失われつ

つあるのではないかと懸念している。例えば、パーティー企画の際にプラナーを募集するが、自主的に関わろうとする学生がなかなか現れなかったり、企画を担う学生が同じNUPACE学生に協力依頼をするのを躊躇したりする。また、イベントへの参加者も徐々に減少している。その一因として、筆者は、プログラムが拡大したことで、他のNUPACE学生と知り合う機会が少ないため関係を構築するのが難しく、NUPACEプログラムとしてのアイデンティティを持ちにくくなってきているためではないかと考えている。

学生同士の繋がり以外にも、学生と教職員の繋がりも希薄になってきている印象である。これまでは、生活オリエンテーションでは、全員が自己紹介をしていた時期があり、学生を一人一人認識することができた。しかし、今では、個々の学生を見ることは難しく、オリエンテーション以外で知り合う機会が少ないため信頼関係は築けていないのではないかと考える。信頼関係を構築することは、学生が抱える潜在的問題をくみ取ることにつながるため、信頼関係の構築は非常に重要であると考えている。現在のプログラムの規模を考えると、自然に人間関係が構築されるのを待つのではなく、働きかける必要がある。例えば、学期初めに継続生と新規生の合宿を実施する、あるいは学内でもイベントを取り組むこともできるだろう。これらの取り組みは、単なるレクリエーションではなく、教育的内容を盛り込むことが重要である。このような取り組

みを行うことで、少しでも信頼関係を深めることができると考えている。しかし、繰り返しになるが、現在の体制では実行する余裕はない。重要な取り組みであることを認識しながらも、進められない現実との葛藤は常にある。

5. おわりに

本報告では、年間受け入れ人数過去最多の218名を記録した2019年度を振り返ることで、学生数の増加に伴う課題を報告した。アドミッション業務をはじめ、部局側の負担、宿舎の確保、開講期にみられる課題、教務関係や日常生活への対応の課題、学生同士・教職員との信頼関係の構築などについて述べてきた。課題によっては、既に改善のために取り組んでいるものもあり、工夫をすることで解決できるものもあるだろう。しかし、根本的な問題である体制の改善が急務なのは言うまでもない。2019年3月末で教員が一名退官し、体制は益々厳しくなっている。しかし、これは大学側の決定にも関係しているため、プログラム単独で解決することは難しい。今後の受け入れ人数を維持させながら、プログラムの質を保ち、本稿で報告した諸課題の解決、そして、さらなるプログラムの発展のために、ぜひとも体制の強化をお願いしたい所存である。